666-102
1200501573908
666
102

昭和十二年七月

推薦圖書目錄

第十六輯

大日本聯合青年團

666
102

はしがき

本團が青年の讀物として適當なる圖書の推薦事業をはじめてから既に十ヶ年の歳月を閲したが、本事業の趣旨と意義とは漸次青年團並に青年教育關係方面から認めらるゝに至り、本目錄の如きも其の創刊以來關係方面に於いて大いに歡迎されつゝあることは甚だ喜ばしいことである。

圖書の推薦方法は本團に推薦委員會を設け、新刊圖書に就き毎年春秋二回委員會を開催して、愼重審議の上青年の讀物として適當なるものを推薦し、その都度本目錄及び日本青年新聞を通じて夫々發表して來たものである。

今回の推薦圖書は去る五月十七日帝國圖書館に於て、昭和十一年十二月から本年五月までの間に出版されたものゝうちから、四十六册嚴選されたものである。

青年に良書を普及する事業の意義は極めて大きい。青年の思想の涵養と品性の陶冶との爲にわれわれはどこまでもこれを遂行して行かなければならない。此の度刊行の第十六輯も事業發展の一礎石としての役目を微力ながら果し得ればまことに幸である。

昭和十二年六月

大日本聯合青年團調査部

昭和十二・八・五 帝國圖書館

推薦圖書委員

帝國圖書館長　松本喜一氏
文部省社會教育局青年教育課長　朝比奈策太郎氏
日本放送協會教養部長　小尾範治氏
東京帝國大學助教授　青木誠四郎氏
東京帝國大學圖書館司書官　小野源藏氏
文部省囑託　伊藤治郎氏
帝國圖書館司書　岡田溫氏
大日本聯合青年團理事長　香坂昌康氏
同　常任理事　生駒高常氏
同　調査部長　下村虎六郎氏
同　教務部長　吉永貫一氏
同　編輯部長　熊谷辰治郎氏

目次

修養・處生……一
國家・兵事・社會・政治・經濟……一〇
歷史・傳記……一九
紀行……二六
文學・藝術……二八
科學……四一
產業（農・工・商業）……四五

推薦圖書は全て日本青年館事業部で取次ぐ

修養・處生

佛教の日本的展開

佐藤得二著

菊判　二九六頁　一・五〇　〒・一四　岩波書店

佛教が日本に渡來してから千數百年もの長い間、日本の精神文化發達の上に及ぼした影響は計り知るべからざるものがあらう。佛教は儒教と共に日本文化との深い關係交渉の下に獨自の發展を遂げて來たのである。本書の著者は朝鮮水原高等農林學校教授として修身科の講義において日本道德、日本精神と佛教との關係を考察し、日本佛教の特殊な樣相を闡明しようとしたのである。

右のやうな意圖をもつて、著者は主として親鸞・道元・日蓮の人格及び教格の上に日本的特性を見出すことに努めてゐる。全體の外觀は佛教渡來以降鎌倉時代までの日本佛教史概觀とはなつてゐるが、普通の佛教史とはちがつて、あくまで內面的に、精神史的取扱ひ、著者の憂國の至情、青年を指導し鼓吹せんとする氣魄を漲らしてゐるものである。

敍述が平明であり、かつ著者が特に青年に實踐道德を說かんとする熱意をもつて說いたものであるから、

青年諸君にも魅力ある讀物であることは疑がない。

自然と人

橋田邦彦著

四六判　三四二頁　二・〇〇　〒・一五　人文書院

著者は生理學の權威者であり、しかも禪の奥儀に達した特異な生理學者であることは有名なことである。さきに「碧漂集」といふ書を著はし、またこゝにあげた書と同時に「空月集」といふ書も世に出されたのであるが、その二書はいづれも論文や手記の集錄で、高級に屬し、青年諸君には難解のものである。こゝにあげた書物は全部講演集である。主に高等學校での講演であるがその外でのものもある。講演だけに誰にでもよくわかる。そして著者の立場や考へ方がよくわかるのである。

著者の說いてゐられることは主として學問といふことの根本である。知るといふことはものごとのありのまゝを知るといふことであるといふことから出發するのである。この立場は直ちに宗教の立場と一致するものであるから學問の研究も宗教の「行」と同じことであるといはれるのである。この本に集められてゐる數回の講演は要するにそのことをいろ〳〵な角度から具體的に說明してゐるのである。

著者は學問とはなれて宗教を說く人でもなければ、また學問上の知識を使つて宗教を說く人でもない。實に學問と宗教との根本の結びつき方、或は極端にいへば學問を宗教とする考へ方を、自己の體驗に即して說く人であるといへる。

かういふと學問のことを說く本などは必要がないと思はれる人もあるかも知れないが、學問のことを說くといつてもつまりは生きることを說くのである。人生とは何か、道を求めて生きるといふことはどういふことか、といふやうなことを說くのであるから、諸君も大いに謹んで教へを受くべき書物である。

日本の使命と國民の自覺

清原貞雄著

四六判　二六三頁　二・〇〇　〒・一〇　目黑書店

日本精神に關する八つの論文、即ち「愛國論」「日本の使命」「我が國民性より見た思想問題」「日本思想の發達」「國民的自覺心の發達」「國力の根源」「日本國民の精神」「國民精神と國運の消長」を蒐錄したものである。一見非常に難解の書の樣に見へるが必ずしもそうではない。勿論寢轉んで面白おかしく讀めると云ふ體のものでないことは內容の性質上當然のことではあるが、然し表題だけを見て敬遠して了ふには當らない。記述は極めて平易で誰でも讀める。讀み行くうちに祖國の前途に對して著者と憂を共にすることが出來る。

西洋文明の吸收大いに結構である。よい意味での模倣亦然りである。然しわれわれは常に日本人としての民族的自尊心を堅持しなければならない。之を忘れてはあらゆる文明はわれ等にとつて全く無意味である。この民族的の自尊心と云ふことは世界人としてのわれ等日本人の須臾も忘れてはならないことである。本書で教ふる所は主として國體の本質の徹底的把握である。國體を徹底的に把握すれば自らそこに祖國愛護の精神が生れ出る。民族的自尊心がこゝに根ざすことは云ふ迄もない。徒らに易きに就くことをやめて努力して諸君は本書の如きを讀むべきである。著者は廣島文理科大學教授で文學博士である。

青年を對象とする公民教育

廣濱嘉雄著

四六判　一六一頁・四〇（〒・〇六）　大日本聯合青年團

この本は本團主催で群馬縣一の宮敬神道場に公民教育協議會が開催せられた折、特に御依頼した東北帝國大學教授であられる著者の御講演を速記出版したもので、まことに感銘の深いものである。

著者は先づ公民教育の意義を二つに分つて說明してゐる。第一の意義は既に成人して公民權をも有して居る所謂公民に對して、これを再教育する意味での公民教育であり、第二の意義はこれから公民たらうとする年若き男女青少年に對して、他日成人して公民或は社會人となつた時の爲の教育である。こゝで著者が說かんとする所は勿論後者の意味に於てゞある。著者は青年に對して非常な好意と期待を示して居られる。青年は未熟である。未完成である。未成品である。然るが故にその將來完成に底知れぬ畏れを抱かしめるのである。

然しいくら畏る可き將來性を內在せしめても、玉磨かざれば光なしの喩に漏れず、野方圖な成長はあまり感心したことではない。で、青年諸君としては磨く可き數々の事がらを有つて居られるであらうが、特に本書では公民としての責任と云はうか、義務と云はうか、兎に角立派な公民たるべき資格を敎へて居るのである。著者は「公民教育といふのは、國民卽ち立憲自治の民の社會生活の陶冶である」と云ふてゐる。そしてその公民教育は、家庭教育とか學校教育とか云ふものに對立し或は別個に存在するものではなく、家庭教育とも學校教育とも平行的な存在であるのである。

一見內容の硬さを思はしめる樣な題名であるが、記述は極めて平易で寧ろ大變面白い。青年指導の任に當られる人々には勿論のこと、一般團員の方々も決して骨を折らずに讀め、然も教へらるゝ所の大きなものであるから是非一讀を薦め度い。

忠孝の本義と佛教

福島政雄著

四六判　本文一一三頁　附錄七六頁　一・七〇（〒・一〇）　目黑書店

著者は廣島文理科大學教授で、教育學を講ずる方である。本書は大阪における斯道會の講習で六時間講述したものゝ速記に加筆せるものであるといふ。講述の主旨は「序言」に出てゐる。日本國民において千古一貫して變ることなき忠孝の根本義を明かにするために、佛典の一たる心地觀經報恩品をたよりとして說述したものである。附錄は心地觀經報恩品上下を讀み易く意味の解るやうに書き下したものである。

忠孝の本義を父母の恩、君の恩を報ずるといふ觀念に求め、その根據を報恩品との深い係はりに認めたのである。講を別つこと二十。醇々と說いて誰しもの胸に響くやうに語られてゐる。その間に著者その人の篤厚な人格も自ら浮び出て奧床しい講話である時に襟を正しくして聽くべきである。附錄の方もよく意味の解るやうになつてゐるから、讀んでみられるとよい。深い味の籠る說法である。

放送 處世信念

大倉邦彥著

四六判　一九〇頁・八〇（〒一〇）　大倉精神文化研究所

著者は大倉精神文化研究所の創立者であり又現に所長である。往年左傾思想の盛んであつた頃、國民精神の頽廢を憂へて大倉精神文化研究所を創立して以來、今日迄日本精神の闡明の爲につくさるゝに年あり、氏の眞摯敬虔な信念の前には誰しも頭をたれざるを得ない。

本書「處世信念」は同題名のラヂオの連續放送講演の速記を主としたものであるが、尙この外に同じくラヂオの放送講演「青年と勤勞生活」及び警視廳工場協會主催の職長修養會に於ける講演「日本精神と產業」の二篇が加へられてある。

主篇たる「處生信念」について云へば、「世渡りの術は慾を去るに在り」「無我の奉仕」「目標を高く持て」「世間は道場也」「修養」「臣民道」の六講に分たれ自利卽利他の精神と奉仕の精神を說き、高い目標を目指すべきことを敎へてゐる。そして結論として著者の持論である臣民道に導いてゐる。臣民道と云ふのは、我等の一切は天皇に捧げ奉つたものである。我等の一切の行動は天皇の臣民であると云ふ自覺の下に於てのみ可能なのである。從つて我等の一切の社會生活は、皇運を扶翼し奉ると云ふ一點に集中されて初めて有意義なのであると說くのである。斯う書いて來ると如何にも理詰めの議論の樣であるが、本書そのものは決して理論めいたものでない。極めて平易卑近な例話の中に巧みにこれだけの理論を織り込んでゐる。青年諸君には必讀の書として推薦するに吝ではない。

放送懺悔

永田秀次郎著

四六判　二六二頁　一・三〇　〒・一二　實業之日本社

ラヂオで放送されたもの、各地で講演されたもの其の他で約三十篇を收めたものである。卷頭に「放懺悔と云ふ短文があつて之を著者は序文代りにと云つて居られるが仲々に敬服にたえない處がある、著者は話術の巧者として定評がある。ラヂオの放送でも講演でも、或は單なる挨拶の詞に類するものでも、この著者の口をついて出る言葉は飄逸で、おほらかで、そして滋味がある。聞く者は唯如何にも輕妙なその話術に傾倒の餘り、著者を性來の話術の巧者と思ひ勝ちであるが、卷頭のこの一文を讀めば成程と首肯出來る。著者はわづか三分か五分の挨拶の詞にも十二分の用意と練習を怠つて居られない。あの輕妙な話術も必竟著者の努力と心がけの結果であることを教へられる。

その他例へば後藤新平伯を追回する言葉でも、教育に關する論說めいたものでも、或は青年諸君に呼びかけた「享樂主義を排す」と云ふ樣な訓話めいた題のものでも、この著者獨特の輕妙な所、飄逸な所があり、然もそれがゆつたりとした態度で語られてあるので知らず知らずに讀み通すと云ふ樣なもので、盛られた內容から云つても青年諸君には洵に打つてつけの良い讀みものである。

社會の新歩道

石井滿著

四六判　三二五頁　一・五〇　〒・一四　春秋社

本書にはすべてゞ二十三の講話が收められてある。その中十五はラヂオでの放送講話であるが、いづれも通俗講話であることにかはりはない。

講話の內容はすべて修養に關するもので、例へば「物を積む話」とか「家を護れ」とか「逆境に感謝せよ」とか云ふ題名が既にそれを示してゐる。中には若干婦人相手の講話とおぼしきものがあるが――例へば「婦人公民權の話」「女大臣の話」（フランス、アメリカに於ける女の大臣の話）「史上に輝ぐ女性」（フランスのジョージサンド、スエーデンのエレン・ケイ、アメリカのフランシス・ウキラードの三人の女性についての講話）等――これとて別段青年諸君が讀んで益にこそなれ害になるものではない。又最後の「鐵道の大家族主義」は恐らく鐵道の從業員だけを對象にしてなされた講話らしく思へるが、一個の家庭生活が犧牲の精神に依つて鞏固にされると同樣、鐵道大家族主義は相互愛、互讓、犧牲と云ふ貴い精神に基いて始めて一致團結が完成さるゝことを說いたもので、之は廣くすべての社會人が心がけなければならない大精神で、何も鐵道從業員だけに限らない。從つて之も諸君に讀んで頂かなければならない講話である。

この講話集が大變讀み易く、題名にも似ず軟かい感じで讀めるのは、例話が多い爲めであらうと思はれる故人の逸話や、日常われわれの身邊に起り勝ちな問題の例話を巧に織り交ぜて面白く講話を進めてゐる。著者の話術の巧名さが目に見えるやうである

國家・兵事・社會・政治・經濟

日本外交論

佐藤忠雄著

四六判　二五二頁　二・〇〇　〒・一四　國際經濟研究所

本書の著者は、有爲の前途を惜しまれながら昨年夏病のために急逝された在米大使館二等書記官であり、生前歐洲に在勤せられたこともあり、また多年外務省情報部にあつて國外國內の情勢に通曉し、殊に情報部第三課長として國內の外交知識普及に力を盡し、講演にラヂオに一般國民に呼びかけると共に、世界の輿論の指導にも多大の貢献をせられた方であるといふ。

著者が本書において述べんとするところは「日本外交の本質的態度」といふべきものであり、これによつて一方國民に自國の外交に對する認識と信念とを養成すると共に、他面外國の日本外交に對する疑惑を一掃し正しき輿論を啓發せんとするにある。

第一章は日本外交政策の沿革と現狀の概說であり、日本外交は終始一貫して平和外交であることを力說してゐるのである。第二章及び第三章は、最近における國際關係並に情勢の鳥瞰圖であつて、第二章においては帝國外交の基調を檢討し、進んで日本外交の進路に說き及び、第三章においては日本外交の汎世界性を論じて、現下の世界情勢が「武裝の平和」における歐洲大戰前の狀態に髣髴してゐることを論じたものである。

現在の情勢に鑑みて外交問題が如何に重要なものであるかは、青年諸君も夙に感知するところであらう。近時の政變に際して、われ〳〵の外交に對する注意は一層喚起せられたかに思はれる。この秋に當り日本外交の本質を根本的に理解する必要がある。本書は正に適切な指南車となるにちがひない。

話題の陸海軍史

松下芳男著

四六判　三三八頁　一・五〇　〒・一四　忠勇社

軍旗と云ふものはいつ出來たものだらうか、最初にどこの聯隊に御親授になつたのだらうか、陸軍大臣は、參謀總長は、教育總監は一體どう云ふ經過の下に設けられたものだらうか、こんな問題は勿論あます所なく

本書に說明されてある。その他われわれは陸海軍について知り度いことが澤山あるが――例へば、教導團とは、屯田兵とはと云ふ樣な古いことから、大演習とか航空機、空中分列式戰車と云ふ樣な新らしい話題、海軍で云へば砲塔とか魚雷、潛水艦、その他各種艦船の等級とか云ふもの、その他數へ上げれば限りがないがその樣なわれ〳〵が知り度いと思ふ陸海軍に關する話題を集め、之れを適當に分類して讀み物風に解說したのが本書である。そしてそれ等の話題を適當に配列して順序立てゝ行くと明治以後のわが國の陸海軍史となるのである。一寸陸海軍に關する辭典の樣なものであるが、所謂辭典特有の無味乾燥な所は毛頭なく、寧ろ誰が何處から讀んでも面白いものである。著者は明治以降の軍制史の研究家として著名である。

經濟學入門

波多野鼎著

四六判　二三六頁　一・五〇（〒・一〇）　日本評論社

「はしがき」によれば、本書は昭和十一年の夏九州帝國大學主催の夏期講習會で「經濟機構の解剖」といふ題目で試みた講演の速記に加筆したものであるといふ。著者はまた本講について次のやうにいつてゐる。「經濟機構」を說くに當つて、我日本經濟を常に視野の中に置いてゐたことは言ふまでもないが、更らに靜止的な日本經濟ではなしに、歷史的な變化の過程中にある日本經濟を眼から離さなかつた。したがつて自由主義的經濟機構から統制主義的經濟機構がどのやうにして生れて來るか、その經濟的必然性は何處にあるか、が講演の一中心點となつてゐる。」と

右のやうにこの書の特色は、日本經濟の實際に常に關聯しながら經濟の理論を平明に說いたところにあるのである。經濟原論といふものも世に數多くあるが、とかく抽象的になつてゐて諸君には興味もなく、難解でもあるので、奬め難いし、奬めても無意義であるが、さりとて經濟の一般的理解は今後の國民はどうしても持つてゐなければならぬのである。そのための良書を待望してゐたわけであるが、本書はそれにまさに應へるものといへるやうである。右の講演が大體中等學校卒業程度の人々を目標としてゐるので、實に平明懇切に解說してゐるから青年諸君にもまちがひなく理解される。是非讀んで戴きたい。

內容の解說はやつてをれないが、大體「序論」で經濟の根本原理を說き、次に「個別的生產機構」「全體的生產機構」「金融機構」「國際經濟機構」の四篇に分けて、商品、貨幣、資本、企業、利潤、利子、爲替、國民經濟、國際經濟等普通一般の經濟學書で說くことを、現實の經濟に卽して具體的に說いてゐるのである。

稅の話

勝正憲著

四六判　四一二頁　一・五〇（〒・一四）　千倉書房

この書は昭和四年に出たものゝ昭和十二年度全改版と銘打たれてゐる。この書は著者がなんとかして租税の觀念を國民に徹底せしめたいとの念願から著はされたものであつて、その熱心は新らしい税法の現はれると共に殆んど年々改訂して今年度の版にまで至つてゐるのである。著者は人も知る如く一度は大藏次官の職にあつた人であり、税制專門家であれば、このやうな本の著述にこれ位適した人は少ないのである。

この書はまづ初め約九十頁ばかりを費して「税金のゆくえ」といふ題で、「我等の費用は我等の負擔」「租税とはどんなものか」「租税の歴史」「租税の定め方、選び方」等々のことについて、實に平易に、懇切丁寧に説明し、誰にも租税の觀念を徹底的に納得せしめようと努めてゐるのである。こゝは誰でも一應讀んでおかなければならない。次に「日本の租税」といふ題目にして、こゝでは日本の税制一般について、所得税から順を逐うて地方税にまで説明してゐる。その説明の仕方も懇切を極はめたもので、屆書式から計算一覽表まで揭げてゐるといふ親切ぶりである。恐らく租税について不審な點があれば何でも相談に應ずるといつたやうな至極便利調法な本でもあると思ふ。その上一貫して著者の熱心は些細なことの説明にまで現はれてゐるのである。青年諸君の家庭にも是非一本を備へておいていゝものだと思ふ。

新農村の基調

那須皓著

四六判　二七五頁　〇・九〇　〒・一〇　日本青年館

この本も諸君御承知の「新興日本叢書」の一編である。多忙なる著者は西山・川野兩學士を助手として、或は口述筆記せしめ、或は要旨を與へて草稿を作らしめ、更に通覽加筆して、嚴正な態度の下に完成せられたものゝやうである。

本書は紛糾と勞苦の只中にある農村の動向を敍述して、生れ出づべき新農村の面目の一端を讀者の前に髣髴せしめんとしたものである。まづ「農村現狀の鳥瞰圖」を與へ、次に「農村問題の史的展發」を示し、それに次いで、その主要問題たる小作問題・農産物價格問題・農業信用と負債整理・農業經營の問題・人口移民問題等の諸問題について論述し、次いで「農村經濟更生運動」の經過、成果並に批判を與へて、最後に農村文化問題に論及して結論を與へてゐるのである。

周知の如く著者の論述は正々堂々たるものであり、直に國民の傾聽に値するものである。「新農村をつくるもの」はあくまで農民自身なのであるが、さりとて農民に過重の負擔と期待をかけてはいけない。國民協力して爲すべきを爲し、爲さしむべきを爲さしめなければならないのである。「自力更生」といふことにも限

度があり。徒らに農民を苦しめて傍觀する態度の絶對に非なることを力說してゐる。また著者は農村文化問題の重大性を强調せられるのであつて、制度の改善も結局は人物の問題であることから見て極めて當然の意見とはいひながら、今日各種多端の問題の場合において特に重要な觀點とならなければならないのである。文化的施設の缺陷してゐる農村においては特に强調せられなければならないことである。

著者の畫く新農村の面目は大樣次のやうなものである。「それは第一に我が國家及び民族の特質に基きて家族制度、隣保共助制度を新時代に卽するように活かし發展せしむべき形態を具へねばならぬ。第二に農村に於ける產業組合運動の精神は一層醇化せらるべく而して都市に於ける組合運動の發展を俟つて、農村と都市との經濟的連絡は徐々に組合的紐帶によらしむるの用意を實現せねばならぬ。第三には民族の泉源として特に農村が負擔する重大なる義務を完全に果すべき教育、保健、其他が充分に考慮實行せらるべく、その爲めの經費は悉くを農村に負はしめざるようの注意が拂はれねばならぬ。第四に農產物の生產配給等に關しては全國的の大なる自治的組織が作らるべく、かゝる組織及ひ國家による適切なる統制の下に個々の農村は立つて居らねばならぬ、等である。」

右のやうな趣旨のものであるから、靑年諸君も是非一讀しておかねばならぬ眞に有益な著述である。

櫻と日本民族

佐藤太平著

四六判　二三〇頁　一・三〇（〒・一四）　大東出版社

「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花」云ふ迄もなく本居宣長の歌である。昔から櫻は我が國民性を表徵する所の國花とされてゐる。あの淸淨潔白の山櫻花、微塵の衒氣もなく、美しい嫩葉に擁されて野となく山となく咲き匂ふてゐるあの山櫻花にわれ等の國民性を表徵せしめることは、何とも云へない誇を感ずる。再び云ふ。櫻こそは大和心の表徵と。「花は櫻木人は武士」と云ふ言葉がある。又藤田東湖は正氣歌に「發しては萬朶の櫻」と歌つてゐる。宜なる哉である。

本書はこの國花を我が國民との思想的關係の上に究明しようとしたもので、まことに珍しい著作である。先づ第一に櫻の由來、分布、種類等を稍々植物學的に說明してゐる。先づ序論或は總論と云つた形である。次に文學に現はれた櫻と題して、和歌、謠曲、俳諧、民謠、傳說等に現はれた櫻を丹念に探し出して簡單な解說を附けてゐる。その次は宗敎より觀た櫻で、神木としての櫻佛敎と櫻等が對象問題となつてゐる。その次は國體と櫻と云ふ項であるが、こゝには主として櫻を歷史上の出來事と關連せしめて說明が加へられてある。その次の日本精神の象徵、花見と其の風俗は共に櫻花と國民生活との實際的關連が主題であつて、櫻の

名所、各時代の花見風俗、武士と櫻花精神などはいづれもこの所で論じられてある。最後に櫻の愛好者と云ふ項があるが、こゝには嵯峨天皇、後醍醐天皇を始とし奉つて以下二十名に近い櫻の愛好家の、櫻に關する事蹟と云はうか、逸話と云はうか、兎に角櫻物語を集めてある。櫻町中納言、西行、兼好、秀吉、吉宗、光圀、松平定信、宣長、和泉屋太申、三能花顛、廣瀨花隱、久保櫻顛、池原以文、櫻戸玉緒等の有名無名の士が其の中に加へられてある。洵に類の少い珍らしい讀物である。

ナチ獨逸を往く

四六判　二一三頁　一・〇〇（〒・一四）　亞里書店

大塚虎雄著

ナチス獨逸は世界注視の的である。われ〳〵日本人も次々に報道せられる幾多の事件に耳目を聳動されてその度毎にナチス獨逸に對する興味を高まらせてゐるのである。ナチス獨逸の僞りない眞相を知りたいといふのが、日本人すべての熱望ではあるまいか。ところがこの實情を隈なく書いた本はなか〳〵得られないのである。この本も決して充分にその望みを滿してくれるものではない。著者は東京日日新聞特派員として、ナチス政權成立直前に獨逸に行き、その後約三ケ年間實際に獨逸を見てこの書に集められた文章を書いたのである。著者もいふとほりこの書は「東奔西走した一特派員の見聞記であり、現地報告書である」。約三年間實際獨逸をいろ〳〵な角度からスナップした文章の集錄である。それゆゑ概して輕い讀物であり、全體として纏まりのない感じは免れられないが、反面情勢を生々と寫しとつてゐるといふ長所も見られる。それからまたこの書に現はれてゐるところはナチス政權の初期約三年間の情勢であつて、その後の今日に至るまでの經過發展はわからないのであるから、その點の不滿はどうにもならないが、ナチスの據つて立つところとその向ふべき方向とは大凡そ察することが出來るのであるから、決して無意義ではない。

この本の篇別は「最近のナチス・ドイツ」「ナチスをめぐる國際情勢」「國民革命現地報告」「ナチス社會世相」「ナチス人物篇」「ナチス・ドイツ紀行」の六篇となつてゐる。「ドイツ女性氣質」とか「ヒットラーの横顔」とか「支柱ゲーリング」「智謀ゲッペルス」「ヒットラー氏の山莊を訪ふ」といつたやうな記事が、なんといつても讀物として一番讀者の興をひくのではないかとおもふ。青年諸君も必ずや喜んで讀まれることゝおもふ。

歷史・傳記

明治史講話

菊判　三七三頁　二・五〇（〒・一四）　吉川弘文館

渡邊幾治郎著

明治史を平易に記したものは澤山あるようで案外少ない。少ないどころか殆どないと云つてもよい。本書はその意味で類稀れである。

類稀れである上に本書には重要な一つの特徴がある。それは明治天皇を中心とし奉つての明治史であると云ふことである。明治天皇を中心とし奉らない明治史には凡そ意味がないと云ふのは此著者多年の主張である。そして此の主張を肯定せしむるに足る著述をこの著者は既に數册有つて居られることは讀者の既に承知さるゝ通りである。（この目錄にも屢々推薦してゐる。）

實際の處、明治天皇を中心とし奉つての明治史の講述に至つては、長年明治天皇紀御編纂の事に當られたこの著者としては他の追隨を許さゞるものがあり、正確なる資料を如何に豐富に用意せられたかは一讀直ちに首肯出來るのである。われわれは本書に依つて今更ながら　明治天皇の偉大なる御人格が拜察せられ、讃仰敬慕、感激の念の新たなるを覺ゆるのである。尙本書は東京中央放送局より放送せられた講演筆記を骨子とし、之に前後數章を增補したものであることを附記しておく。

日本古典物語

前田晁著

四六判　三七五頁　一・五〇（〒・一四）　千倉書房

この書は日本古代から室町時代までの古典文學の主要なものを通して、われ〳〵の光榮ある祖先の感情生活を一通り見ようとしたものである。この書は、それ〴〵著者はちがふが、「東洋古典物語」「西洋古典物語」と三部作をなす一編であつて、日本に關するものであり、諸君にも親しみ深いものであるし、一通り知つてもおかなければならないものであると思ひ、あげたわけである。

まづ「記紀の二典と傳說」といふところでは、古事記・日本書紀・風土記の三書について說明してゐる。その成立ちから、大體どんなことを書いたものであり、その特色はどんなところにあるかといふ風に說いてゐるのである。この說明の仕方は以下大方同樣である。次に「漢詩文集」として懷風藻といふ奈良朝時代の漢詩集をはじめとして五集について述べ、「和歌集」のところでは萬葉集から說き出して古今・新古今と、西行の「山家集」、實朝の「金槐和歌集」とをあげ、をはりに南朝歌集ともいふべき「新葉和歌集」について說いてゐる。「說話物語」では日本靈異記とか今昔物語とか宇治拾遺物語とかその他四編について、「小說物語」としては竹取・宇津保・源氏等の物語、「自傳物語」としては伊勢物語・蜻蛉日記・和泉式部日記の三編、「日記・紀行」では土佐・紫式部・十六夜等の日記と海道記・東關紀行の如き紀行文について述べてゐる。「隨筆」は枕草紙・方丈記・徒然草の三書であり、「歷史物語」では榮華物語や大鏡・增鏡等の鏡物から神皇正統記等のことについて說いてゐる。「軍記物語」では周く知られてゐる平家物語や太平記・義經記、曾我物語といふやうなものも入つてゐ

る。「歌謠」は神樂歌から室町時代の小歌まで一通り說明され、「謠曲と狂言」では紅葉狩と末ひろがりの二つといふやうになつてゐる。

大體右のやうなわけで、全部を盡してゐるわけではないし、說明も簡略至極なものではあるが、どのやうな時代に、どのやうな文學が現はれたかは大體知ることが出來るのである。

吉田松陰

四六判　三九七頁　一・五〇　〒・一四　岩波書店

玖村敏雄著

吉田松陰傳は世にその數少なくはないが、本書は近來最も特色鮮かな著述である。著者は廣島高等學校教授であり、松陰全集十卷の編纂に關係した人である。本書も同全集第一卷の始めに載せた傳記を訂正增補したものであるといふ。

本書における著者の立場は次のやうであるといつてゐる。「筆者は少しく立場を變へて家庭人國家人として生ひ立ちつゝ求道的生活に卽して生長して行つた思想過程に重きを置き、それと行動、殊に教育者的行動との關聯を見失はぬやうに注意した。再言すれば松陰の內面的生活の展開を最も重んじたのである。」卽ち本書は教育者としての松陰の發展を仔細に吟味したものであるといつてよい。

內容は「山鹿流兵學師範時代」「遊歷時代」「第一回在獄時代」「幽室時代」「再獄時代」「殉難前後」「流風遺響」の七章から成つてゐる。まことに緻密丹念な著述であつて、一氣に讀了するといふやうなわけには行かない書であるが、どの一章でも念を入れて讀めば自ら襟を正し、感銘せざるを得ない本であると思ふ。

松陰の人物について著者の見るところは甚だ剴切に思はれるから、少し長いが引用して諸君の理解に供したい。曰く、「吾人は松陰に於て眞に充實せる人、まことの日本人の嚴肅なる一模範を見る。その生涯は僅か三十年で終つたが、終始を一にして貫かれた至誠の行はよくこの人に三十歲の完成を與へ、歷史に育くまれ歷史に生き歷史を產みつゞけて幕末日本の黎明に力强い存在を刻印した。素よりその間には蹉跌もあり未熟なところもあつたが、その蹉跌と未熟の中に猛然蹶起して常に自らをより深く凝視し、より切實に思索し、如何なる逆境にも斷じて自らを棄てず實踐に敗れる每により高き實踐に生きようと努めたのである。それは大所高所から客觀的に批判すれば或はなほ不十分なる點もあるであらうが、三十歲の人に於ける完成をそこに仰ぎ、それまでに至る生命の全體的な趨向に限りなき力の潛めるを感ずるのである。六十七十に至り渾然無跡の境に入つた人はともかくも、松陰と共に步まねばならぬ若き人々にその傳記を提供することは吾人の爲さねばならぬことであると信ずる。」

乃木將軍

木村毅著

四六判　三六七頁　一・五〇（〒・一四）　千倉書房

日露戰爭の際の日本軍の主腦は名將揃ひの豪華版とも云ふべき所だ。曰く大山、兒玉、黑木、奧、乃木、野津、川村。だがそれらの諸名將も時の流れに隔てられて、いつの間にやら吾々の間から遠のいて行つてゐるのに、乃木將軍一人だけが何時迄も身近にその存在が感ぜられるのは何故だらう。之に就いて著者は「それは將軍が神算鬼謀の名將だつたからではない。むしろその點では、前記の諸名將の中で、乃木將軍は戰爭が一番拙かつたやうだ。と云つて又、將軍が高潔なる人格者であつたためだとも、神人であつたからだとも私は思はないのである。吾々はかゝる文字にはむしろ反撥を感ずる。それならなぜだ。とダメを押してみて結局殘る結論は、使ひ古された言葉だが、やつぱり將軍の人間味に歸する外ないと思ふ」と云つてゐる。

從つてこゝにこの著者に依つて描き出された傳記小說乃木將軍は人間乃木である。嚴格なやうで、おどけた、眞正直のやうで、それでゐて一寸食へない爺のやうな、敬虔であると共に飄逸なと云ふ樣な人間乃木の性格がこの著者の狙つた處である。

讀んで行くと至る處で涙がホロリホロリとこぼれる。著者の筆の巧みさもあるであらうが恩愛の將軍人間乃木の現はれであらう。どの頁を開いて見ても溫い將軍の息吹を感ずるやうである。

日本名將論

水野廣德著

四六判　四五九頁　一・七〇（〒・一四）　中央公論社

冒頭に著者は「資本主義經濟も、議會主義政治も、自由主義教育も、さては科學學說までも再檢討を受けつゝある今の日本である。封建思想に歪められ、時代權力に曲げられた古英雄の再檢討も或は何等かの意義があるかも知れない」と云つて居る。從つて古來將と呼ばれて來た史上の人物を新らしい解釋の下に見直そうと云ふのが本書の本統の目的かも知れない。だが、そう云ふ目的は別にして本書は仲々に面白い。著者は「此一戰」でお馴染みの海軍大佐、取り扱はれたのは義經、淸正、光秀、三成、秀吉、家康、淸盛、賴朝、信玄、謙信、義貞、尊氏、將門、爲朝の十四將で、これ又我々に馴染み深い。

義經が國民の——就中子供の——人氣者であること、天下取りの秀吉と家康の大きなえらさ、公卿の打倒者としての淸盛、武權確立者としての賴朝、快男兒爲朝、逆臣尊氏將門等は先づ從來通りと云ふ處、淸正に至つては從來の評價が少し過重のきらひありとして多少割引をしてゐる。光秀、三成の兩將には頗る同情をして大いに狀情を酌量してゐる。最も氣持ちのよいのは信玄と謙信で、著者は特にこの兩者を戰爭スポーツマン

と呼んで、この兩勇將の間に横はる美しいスポーツマンシップを稱揚してゐる。讀み物としても面白いし、之等の名將を生んだ當時の社會情勢も窺へる體のものである。

紀行

西洋拜見

四六判　三六三頁　二・〇〇（〒・一四）　岩波書店

辻　二郎著

著者は工學博士と云ふいかめしい肩書を持つて居られるが、本書を通して窺つた所では趣味の豐かな、モダーンな紳士であるらしく思へる。文章は誠に達者で唯々感歎の外はない。

「西洋拜見」は一寸頓狂な題名であるが、全く文字通り著者の歐洲紀行で即ち西洋拜見記である。題名から多分に皮肉が含められてゐるが、内容も西洋萬能ではない。日本を出帆して印度洋を通つて歐洲着、歐洲を一わたり歩き廻つて米國經由、太平洋を船で渡つて再び日本の領海に入り、富士山の高いのにビックリする迄の謂はゞ世界一周記である。

本書にはその外「理化學馬鹿」「ある研究者の死」「科學拜見」「隨筆」の四篇が收められてあるが、いづれも輕妙にしてモダーンな、從つて明朗な筆使ひが非常に讀者を惹きつける。この本を「紀行」の所に分類所屬せしめたのは、分類の便宜上主として題名の「西洋拜見」に依つたのであるが、實際の所西洋拜見は本書の半分位で、以下は前掲の四篇に依つて占められるのであるから讀者はその積りで本書を繙かれたい。尚この著者にはこれと同樣な内容のもので「偏光鏡」と云ふのがやはり岩波書店から出版されてゐる。どちらを讀んでも同じ樣な感じで姉妹篇とも云ふ可き所である。

滿洲から北支へ

四六判　三七〇頁　一・五〇（〒・一二）　海外社

神田正雄著

門野重九郎氏の「序」によれば、「著者は支那通中の支那通であり、支那研究の權威であることは今更申す迄もない。其の初めて支那に渡つたのが明治三十五年で、四川省に三年又半、北京に十年その他主な都市の在住を合せると十五六年にもなる。其の間、各方面の研究に沒頭され、其の後も問題の起る毎に、實地の踏査に出掛けられたこと十數回に及んでゐる。著者が問題に當面するや、得て陷り易き机上論を避けて、直ちに

實況を視、その起る所以を探究し、將來を判斷して世に問ふといふ極めて眞面目な態度を採つて居る。」とある。これをもつて本書の內容並に價値も大體察することが出來よう。第一篇が「滿洲國」であり、第二篇が「北支那」である。普通一般の紀行視察と異り、その觀察探究實に綿密なものである。讀者は時にはその煩に耐へないやうな感を抱くことがあるかも知れないが、このやうな支那視察記こそわれ〳〵は讀むべきである。支那の現狀を知悉することは今日何よりも重大である。大體觀ではいけない。あくまで緻密に、微妙に動く支那の實情を看取しなければならないのである。本書は決して無味乾燥ではない。視界の移り行くに從つて變化の妙味もあり、時には「後魏の都と雲崗寺」を探り、時には「楊貴妃溫泉の淸遊」を試みてゐるのである。興趣なか〳〵盡きぬものがある。卷頭數葉の寫眞も美しく、到るところ挿入の寫眞も樂しめる全文振假名付であり、誰にも樂に讀める

文學・藝術

短歌入門

土屋文明著

四六判三五六頁　一・五〇　〒・一四　古今書院

短歌入門の書は數多くあるが、眞に我々の信頼に足るものは少い。單に技術的な指導に止まらず、作歌の根本精神より讀者を導いて、眞に歌を作るとは如何なることか、歌の如何なるものたるかを理解させることのためには、著者の力量人格共に信頼するに足る人でなければならぬ。土屋文明氏は人も知る如く、アララギ派の重鎭であつて、歌壇に重きをなす人であり、我々の信をおくに足る人物であると思はれる。

この本はこれまで土屋氏の書かれたものを集めたのであるが、大體からいつて理論と實際との兩部分に別けられるやうにおもふ。理論の方では「短歌概論」などは理論整然とした、最もよく纏まつたもので、少し高級ではあるが、今のところ最もよい短歌概論として諸君にもお奬め出來るやうにおもふ。「現代短歌指針」はその前階段として讀まれた方がいゝかも知れない。「短歌手ほどき」「短歌の作り方味ひ方」「初心者のために」「添削と批評」「應募歌選評」などは實際指導に入る分であらう。これらによつて短歌の味ひ方とか作り方を充分に納得することが出來よう。たゞ併し注意すべきことは、こゝにいふ理論の方面も實際の方面も共に讀むといふことである。土屋氏の歌論はアララギのいはゆる寫生道に立脚してゐるのであるから、その精神を理解してかゝらないと實際指導の方面も充分に解るといふわけには行かない。寫生道といふことの解釋如何にもよるが、まづ作歌の大道と見ていゝものであらう。こゝに說くところを眞當によく理解して、それから自分でおのづから發明するところがあればいゝのである。靑年諸君にも短歌の好きな方は多いことであらう。それ

らの諸君に進んでこの入門書をお奬めする。

森の小徑

若山牧水著

四六判　三五四頁　一・五〇（〒・一四）　第一書房

この書は牧水の隨筆選集である。「卷末に」といふところで、未亡人喜志子夫人は、「牧水の散文といへばすぐに紀行文を考へる人が多くはないかと思ひますが、篇數からいへば隨筆とか小品とかいふものの方が遙かに多く、全體の量もほぼ紀行文と同じ位になつてゐます。本書はそれらの中の代表的なものを輯めたもので、これだけ讀めば大體に於て牧水の隨筆を讀んだと言つてよからうと思ひます」といつてゐるやうに、牧水といへば誰しもすぐ旅の歌人であり、名紀行文家として思ひおこすのであるが、この書はいはゆる紀行文以外の隨筆を集めたもので、紀行文は別に「幾山河」といふ題名で近刊せられる豫定のやうである。だが、この隨筆集の中に紀行の文がないといふのではない。旅にかゝはる文が多く入つてゐるのである。題目でも「若葉の頃と旅」「草鞋の話」「旅の話」「枯野の旅」といつたやうな工合である。それらでは旅の思ひ出、旅の印象を語つてゐる。そしてやはり旅について書く牧水が最もよく自然詩人たる面目を發揮するものゝやうである。

周知のやうに牧水は晩年沼津の千本松原に住んでゐた。この書の題名も「卷末に」よれば、牧水が生前好んで千本松原の中の靜かな小徑を散歩したことから、またそれについて書いた文章も少くないところから、喜志子夫人がそれに因んで名付けたものであるといふ。この書の終の方に「沼津千本松原」といふ題目の一文もある。

いづれの文を讀んでみても牧水の純朴な自然人らしい人柄がよく現はれて懷しいものである。牧水が酒を好んだことは隱れもないことであるが、この書にも「酒と小鳥」「酒の讃と苦笑」等の文がある。牧水が酒を好むことは幼兒のやうな無邪氣さであつた。われ〳〵はそこに牧水の人柄を見るだけであつて、酒が牧水を自然詩人たらしめたと見るべきでないことは勿論である。彼は貧苦の中に自然と親しみ、人生の歡苦を嘆き歌つたのである。この書の文中にも多くの歌が織りこまれてゐる。

今日世路いよ〳〵艱難を加ふるとき、人は自然を思ふの情に耐へないものがあるやうである。この書を讀むことはたゞ一掬の慰安を得るに止まらないで、何かしら人生について學ぶところもあらうと思ふ。

躍進日本の歌

北原白秋著

袖珍　四五九頁　一・二〇（〒・一〇）　アルス

この書について著者はかういつてゐる。「本集は、かの『青年日本の歌』に次ぐ第二の我が國民歌謠集であ

るが、爾來、皇軍をはじめ、官廳、都市、團體、學校、新聞等、國家の重大に對し、關與すること愈々深く、その影響の及ぶところ、亦既に前日の比ではない。而も虔みて此の翼賛の誠を盡すべく、その任を任とし、此の覺悟を覺悟として、奮つて其の依囑に應じ、また自ら進んで、一片衷々の志を懇へた歌謠の綜合集が是である。」と。

收錄するところ百四十五篇であるが、六部に分れ、「皇軍の歌」といふところには、「大陸軍の歌」「皇軍行進曲」「海軍日本の歌」などがあり、「正大日本の歌」のところには、「大日本警察の歌」「選擧肅正の歌」「日本産業の歌」などいふのがあり、「興隆日本の歌」のところには、「日本國民の歌」「非常時音頭」「皇太子さまお生れなつた」「オリムピック應援歌」などがある。次が「校歌」の部であり、次が「生活讃歌」の部として、「生物愛護の歌」とか「健康の歌」とかがある。最後の第六部は青年諸君にお馴染みの「自主創造の賦」「白日の朗誦」といふ朗誦文二篇である。

以上の如きものであるが、作曲者としては大方山田耕作氏が提携してゐるのである。青年諸君にも親しみ深い歌曲も多いことであらう。

現代俳句論

水原秋櫻子著

四六判　二八五頁　一・〇〇　〒・一〇　第一書房

青年諸君にも俳句の好きな人がかなり多いことだらうとおもふ。俳句は短歌にも增して日本人の詩として日常生活の友とするに適したものゝやうである。俳句といふと何か老年の文學のやうにおもふ人もあるが、青年の間にも句作をする人が多いのである。しかしなんといつても俳句は寂びの世界であるといふやうな考へはぬけきらないとおもふ。さういふ根本觀念を改めようとするのが、現代俳句の動きであるといつていゝとおもふ。この書の著者などはその先頭に立つて華々しく働いてゐる著名な人である。ながく高濱虛子氏の「ホトトギス」派に屬してゐたのであるが、意見の對立を來して昭和六年かに袂別し、一派を起して今日に至り、盛名隆々たる人である。

この書は「現代俳句論」などといかめしい名になつてゐるが、決してそんな難かしいものではない。自分達のやつてゐる現代俳句について、解說し、その鑑賞やら作法やらを說いた本である。著者の說き方は平明で解り易いから、青年諸君も充分理解することが出來るし、實際俳句をやる上にも爲になるだらうとおもふ。第二篇が「作法雜記」となつてゐる。これと第三篇の「俳句の評釋」がこの書では一番重要な部分となつてゐるの

である。第一篇は「本質に關する諸考察」であるが、この部分は簡單に扱はれてゐる。

著者の主張は昔からの俳句の形式上の約束、十七字とか季題とかは守つて、芭蕉などの作り出した世界に捉はれず、現代人の自由な感情をそのまゝに歌ひ出すといふのである。尙著者は調べといふことを重要に考へて調べのよい美しい俳句を作るといふことにあるやうである。この書を讀んでみたら、諸君には同感のところも、また同感出來ぬところもあらうが、俳句の鑑賞作法上には爲めになるとおもふ。

山原野牧場

坂本直行著

四六判　二三二頁　一・二〇（〒・一二）　竹村書房

著者は北海道の生れで、北海道帝國大學を卒業、目下日高で牧場の生活を營んで居る徹底的の北海道つ兒である。

この本は著者の牧場生活の記錄であつて、こゝで山と云ふのも原野と云ふのも牧場と云ふのもすべて北海道のことで、如何にも素朴で然も詩情の溢れた生活が美しく描き出されてゐる。描き出すと云へば、この本には線のあらい然も詩情の豐かな――丁度この本の內容とぴつたりする樣な挿繪が澤山はいつてゐるが、これもこの著者の筆になつたものである。裝幀も恐らくこの著者の手に依つてなされたものであらう。

こゝに本書を諸君に薦める理由は、何も北海道の風物を本書に依つて知つて頂かうとするのではない。一册の讀物として、文藝作品として、本書の中に盛られた素朴さと詩情とが若き諸君に訴ふるものがあらうと思つてゞある。

ジヤングル　ブツク

キツプリング著　中村爲吉譯

岩波文庫本　三〇六頁　・四〇（〒・〇六）　岩波書店

原著者キツプリングは英國の詩人で昨年七十二の高齡で歿したが、生れたのは印度で、少青年時代は印度で送つた。二十八歲の時アメリカへ渡り次いで英本國に歸つたのであるが、その時は一寸ばかりではあるが我が國にも足を留めてゐる。

この本は七つの話から成り立つてゐる。その中始めの三つは狼に育てられた少年モーグリを主人公とした印度の大叢林（ジヤングル）に於ける野獸の生活を描いた物語で、この三つの話を支配してゐるものは直きを愛し曲れるを憎む强い正義の觀念である。元來少年向きに書かれたものであるが、野獸の社會に於ける正義觀の描寫は一面人間社會に對する一つの諷刺とも見られ、單なる少年の讀物とは思はれない。後の四つは白あざらし、猫鼬（モングース）リツキ・ティツキ・ターヴィ、少年象トウーマイ、及び印度の英國駐屯軍隊に使はれてゐる獸たちを主人

公とした美しい詩情の豐かな物語である。

はるかな國　とほい昔

ハドスン著
壽岳しづ譯

岩波文庫判　四八三頁・六〇㊀・〇九　岩波書店

原著者ハドスンはキップリングと同樣英國の文學者であり同時に又博物學者でもある。西暦一八四一年、南アメリカはアルヂェンチンの都、ヴェノス・アイレスの近くの一村で生れたと云ふことであるからキップリングよりは稍々先輩格である。二十九歳の時初めて故國英本國に歸り、文學と博物學に地味な研究を續けたのであるが、彼が世の中から認められるようになつたのは六十歳を越してからである。

この本は彼が未だ南米に居つた少年時代、嚴密に云へば十五歳位までの少年期の思ひ出を自叙傳風に書き記したのである。廣い南米の大草原パンパズ（アマゾン河以南の大草原のこと）を背景に、犬とか馬とかその他の家畜、珍らしい樹木。素朴な人々を相手に暮したこの時代の彼の日常はまことに詩の樣である。後年彼が博物學に志したり、自然界のあらゆる生きもの（動物も植物も）に深い愛情を注いだりした彼の性格の萠芽も、正しくこの時代に培はれたものと思はれる。

この本を「はるかな國　とほい昔」と名づけたのは、彼がこの本を七十七の老齡に及んで出版したことによるので七十七の老ハドスンが「はるかな國」と呼んだのは無論遠い南米のパンパズ、アルヂェンチンを曰ふたのであらうし、「とほい昔」とは半世紀以上も昔の少年時代を振り返つて懷しくそう呼んだのであらう。まことに博物學と文學とが美しく交錯した詩の樣な自叙傳である。

眞實一路

山本有三著

四六判四五四頁　二・〇〇㊀・一四　新潮社

「眞實一路」は昨年主婦の友に一箇年に亘り連載され大いな反響を呼んだもので、最近は映畫にも製作されてゐる。一編の主流をなすものは、著者の最も得意とする少年の世界を描いたもので、母の愛に餓えて次第に素直な童心を失ひつゝある少年と、之をめぐる父親と姉と母親との苦惱である。

この少年の世界をめぐつて、連れ子のある恩人の娘を妻とし、その妻に家出され、その連れ子を眞の子として育て、しかも不貞の妻に最後まで誠實を捨てない父親を、丁度チェホフの「伯父ワーニャ」の如き重厚篤實なる人間として描き、又その母親はその夫に愛を抱くことを得ず、これをすてゝ眞實の道に生きんとして愛人を追ふて自殺して終る。父も、母も、姉も、そして少年自身も皆「眞實一路」に生きんとするのであるが、性格の相違は決して眞實一路を平坦な路として與へないのである。こゝに幾多の人生問題、社會問題が釀し出

されるのであるが、これ等の問題が誠に誠實に取扱はれてゐる。

小品集　村の無名氏

四六判　三六五頁　二・〇〇　〒・一四　人文書院

水野葉舟著

青年諸君には著者水野葉舟といふ名はおそらく耳新しく響くことであらうが、明治の末年自然主義文學興隆期における著者の名を知る人には忘れ難い名であらうし、今日偶々この名を見る人はおそらくひよつこり舊知に出遇つた感を抱いて懷しさに耐へないであらうと思ふ。當時葉舟の名は新鮮な文名であつた。おそらく小品文といふことばも氏に始まつたのではないかとおもふ。新鮮な自然描寫の文章は當時の青年を魅了したものゝやうであるが、現代の青年諸君は果していかんの感をもつであらうか。「小品集」といふ名を冠し、葉舟の名をもつて、昔ながらの姿で現はれ出て來たのである。

「序」のはじめにかう書いてある、「私が下總の印旛沼と利根川とに近い場所に移住してから、今年は十四年目になります。その間におのづから土地の生活になじみ、少しづゝ自然の魂に親しんで、少しばかりの作品を書いたのがたまつて來ました。この一册はその中の一部分です。」全篇が「村の無名氏」「身邊小品」「季節」の三篇から成立つてゐるが、それについてはかういつてゐる、「初の一組は、少し小說風にした作品です。從つて事實を書いたものではありません。二番目の組は、爐ばた話に似たスケッチです。三番目の組は、日記を基にして書いた季節推移の記錄です。少し人に煩はしい氣を起させるかと思はれるやうに、細かな感銘をたどつて書きました。」

「村の無名氏」といふ第一篇の名はそのまゝ書名ともなつてゐるのであるが、これはおそらく名もない村の人たちの生きる姿に親しみをよせ、それを書き記すと共に、氏自身も亦一無名氏となつた心持の表白であるのだらう。十二篇の短篇がふくまれてゐるが、村人の純朴な、ひそやかに生きる姿を描いてゐて親しみぶかいものである。第二篇の「身邊小品」は身邊の自然を描いた隨筆であるが、季節の篇は著者もいふとほり微細な自然觀察の記錄である。俳句的なといふよりももつと印象的な、ほんとうに煩はしいまでの自然の推移を寫しとつたもので、著者がより益々自然に食ひ入らうとする熱意を見せてゐるものである。

おそらく農村の青年諸君は今でもこの本に親しみを感じるであらう。諸君の身邊に近い人間や自然を見出すことであらう。

日本繪畫史讀本

四六判　三八一頁　二・〇〇　〒・一〇　東邦美術協會

岡登貞治著

著者は「夙に東京美術學校圖畫師範科を出でて、中等教育の實務に携はり、其の後その眞摯なる研鑽と、卓越せる識見とを以て、多年美術教育問題の指導者先驅者として重きをなし、推されて萬國美術教育會議に、帝國代表として再度も渡歐參列し、邦家美術教育のため萬丈の氣を吐かれた」人であるといふ正木直彦氏の序文によつて、われ〳〵はこの種の本の著者として最も適した人であることを知ることが出來るのである。

本書は最初に「時代別に見た日本の繪畫」として時代別に美術發達の歴史を簡單に辿ることからはじめ、第二篇以後は繪畫の實際について古代銅鐸に現はれてゐる文様から說いてゐるのである。作者の明かな時代となつてからは時代順作者別にして、明治の黑田淸輝畫伯にまで辿つてゐるのである。篇を別つこと六十七。それ故その說明はいづれも簡單であるが、その簡單な中に作者小傳を書き、時に逸話を語り、その代表作について述べてゐるのである。簡にして要を得たりといふべきであらう。到るところ名作の圖版が挿入されてゐるが、紙質の關係もありあまり鮮明だとはいはれないが、この種の本としては割によく寫つてゐるといつていゝやうである。一體この種の本はかなり多く出るのであるが、繁簡よろしきを得てゐるといふのは少いのである。この書はその點よく出來てゐるといつていゝであらう。讀物としても無味乾燥でなく面白く出來てゐるし、書きぶりも平明で申分ないやうにおもふ。

靑年諸君がもし日本繪畫の歴史などに興味をよせられ、一通り知りたいと思はれた場合にはこの本をまづ讀んでみられるといゝ。

科學

天文と宇宙

荒木俊馬著

四六判　三五〇頁　二・八〇　〒・一四　恒星社

本書は京都帝國大學助教授である著者が、數年間に亘つて試みられた天文に關する通俗講演の筆記並に科學雜誌に執筆されたものゝ中から八篇を選集して、之れを適當な系統の下に順序を立て、新に加筆修正して出版されたものである。

「序」に著者は「本書は勿論通俗天文書である。然し其の『通俗』なる意味は所謂天文學の專門知識に關して云ふ可きで、本書それ自體は必ずしも通俗的ではないかも知れない。」と云つてゐるが。全くその通りで、本書は所謂通俗書ではない。從來通俗天文書と云へば天體觀測に關する通俗的なもの或は天文挿話とか天文隨筆とかに類するものが大部分で、我々を包む宇宙の構成、その中に浮ぶ天體の構造等に關して學術的に系

統的に然も尙平易に說いたものは少い。

本書はその意味で誠に優れた著作であると思はれる。內容は八篇に分かたれ、中、第一篇「天文學の起原」第二篇「學藝復興と近代天文學の黎明」は何れも天文學の歷史に關するものである。第三篇「天文學の基礎知識」は標題通り、星、太陽、月、萬有引力、天體力學等の天文學の基礎知識を平易に述べたものである。本書の核心をなすのは何と云つても第四篇以下で、目次を揭げれば第四篇「現代の宇宙觀」、第五篇「星辰進化の問題」、第六篇「太陽の黑點」、第七篇「星辰の內部構造」、第八篇「宇宙構造論」となつて居り、何れも近代の宇宙物理學に關するものである。

之等の諸論はその內容に對して最上の平易さを以て記されてあり。勿論本書を讀むに特別の豫備知識を必要としない。若し本書のところ〴〵に現はれる天文數式に對して難解を云ふ人があれば、それ等の數式は一應飛ばして讀んでも現代の宇宙論が如何なる結果に到達してゐるかは樂に了解出來るものである。一讀を薦め度い。

日本の魚類

菊半截　三三四頁　一・〇〇　〒・一〇　大日本圖書株式會社

田中茂穗著

日本の鳥類

菊半截　二五八頁　一・〇〇　〒・一〇　大日本圖書株式會社

內田清之助著

この二著は同型同類の著述であるから並べて紹介することにしよう。著者は双方ともその道の權威者であることは今さらいふまでもなからう。

「魚類」の方は、「はしがき」「本論」「總括」の三部門となつてゐる。「はしがき」は魚類一般についての簡單な說明であつて、「本論」は日本近海に棲む魚類八十五類をあげて、一々簡單に說明してゐるのである。「總括」は「日本の魚の特徵」「魚の利用」「魚の味」等々のことについて說明したものである。

鳥類の方は、それより稍々趣味的になつてゐるといふか、篇別も「鳥類と人生」といふ序講に始まつて、「日本の鳥の分布」「日本の鳥の種類」「鳥の保護」「狩獵」「飼ひ鳥」の五講に分れてゐる。ときゞ〴〵故事や歌などを引いてゐて面白い。「魚類」の方には圖版が多く入つてゐるが、「鳥類」の方は美しい寫眞が入つてゐる。けれど數が少いので惜しい氣がする。

双方ともいはば辭典風の著書で樂しんで讀む本とはいへないだらうが、好きな人ならこれでも充分樂しめるだらうし、またその中の何かについて知りたいとおもふとき出して見ても便利でよいとおもふ。簡單に正

確に科學的知識を得るには便宜な著述だらうとおもふ。一本を備へておいていゝ本である。

家庭電氣讀本

大阪市電氣局
電氣普及會　編

小型本　一八八頁・五〇　〒・〇九　朝日新聞社

電氣と云へば先づ第一に電燈を想ふ。だが我々の日常生活に於ける電氣の恩惠は電燈だけではない。諸君はラヂオを樂しむだらう。之も電氣だ。電車に乘るだらう。之も電氣だ。いやそれ所ではない。諸君の毎朝手にさるゝ新聞を印刷するには高速度輪轉機が使用されてゐる。之も電氣なしには動かない。その他あらゆる機械工業に、一般産業に、醫療に、それから最近は家庭に於ける臺所調度に至るまで電氣應用の方面を數へ上げれば枚擧に遑がない。從つて今日の所謂文化生活なるものをある一面から觀察すると電氣生活と云つても敢て不思義はない樣に思はれる程である。現代は正に電氣の時代である。

本書は大阪市電氣局と電氣普及會とが協同して、一般社會人が誰でも一通りは心得て置いてよい電氣の實際知識を、極めて簡明に、しかも興味深く敍述したものである。內容はすべて〻十一項目ある。その大體を紹介して見れば、最初に「電氣の一般知識」と題して電氣に對する謂はゞ基礎知識に類するものを極めて常識的に扱つて居る。次に電氣應用として最も一般的な照明卽ち電燈につき相當の頁を用ひ、以下主として家庭用の電熱器の種々、ラヂオ、テレヴイジョンについて解說してある。その他電氣料金の話としてメートルの讀み方なども親切叮寧に數へてあり、「屋內配線の知識」「電線の知識」の項目では電氣事故と關連して、稍々專門事項に屬するが記述が平易であるから是非讀み落さない樣にして欲しい所である。「住みよい家の電氣設備」は稍々文化住宅に傾き過ぎて、われわれには少し緣遠いように思はれる。

産業（農・工・商業）

伸び行く一人一研究

大日本聯合青年團　編

四六判　一七六頁・三五　〒・〇六　日本青年館

本團が一人一研究の奬勵を始めてから早くも七年になるが、本書は昭和十年度の團賞（發明賞と産業賞）受領の三研究、共同研究助成金を交付せられた四青年團の事蹟並びに助成金を交付された優秀なる個人研究數篇を收錄したものである。

左に研究項目並に受賞者名を記して本書の紹介に代ふることゝする。

一、發　明　賞

溫室用の火格子及び溫水罐の發明　西村春生（宮崎縣）

一、産　業　賞

農業經營の改善並に作業能率の增進　坂井田藤一（岐阜縣）

溫室經營の研究により一家の更生　山本正司（山口縣）

一、共同研究助成金

養豚研究による一村の振興　瀧尾村青年團（石川縣）

理想鄉を目指して蔬菜の栽培　郡山市横塚青年團（福島縣）

海苔の種類別附着期と改良條件　青堀町青年團（千葉縣）

水産研究に目覺めた漁村青年團の活躍　師崎町青年團（愛知縣）

一、個人助成金

蕃茄と胡瓜の研究　木村善一（三重縣）

蔬菜園の經營と土地利用研究　上田正（兵庫縣）

蠶業界への福音沈降管の研究　茂森柳（滋賀縣）

若きメロン王の農家經營研究　有働貫一（熊本縣）

蔬菜の病虫害豫防驅除と農藥劑使用の研究　小野俊三（熊本縣）

越前地方に於ける先史時代の研究　齋藤甚兵衞（福井縣）

厩肥要說

角田英二
永田厚平　著

菊判　二八五頁　三・〇〇（〒・一四）　西ヶ原刊行會

本書は近年農村經營の中に盛に採り入れられ、好結果を收めて大いにその將來を期待されてゐる有畜農業と密接な關係がある。之に就いては著者の序を藉り、著者をして直接本書に於ける意圖を語らしめることゝする。

「……殊に有畜農業の經營に至つては、從來我國農業の一大特異性であつた無畜農業に活を入れ、是れに依つて危殆に頻した經營を有利に轉廻し、復興しつゝある實例枚擧に遑ない有樣である。而して其の目的とする所乳肉卵等畜産物の生産に依る現金收入の增加、或は畜力の利用に依る勞力の節約等一二に止まらずと

雖も、生産厩肥の利用に依り、農業の經營上最要部分を占むる肥料費の節約を計り、且つ有機物の補給に依り、土地生産力の增進を計るは其の最たるものである。

然るに我國に於ける家畜飼養の歷史比較的新らしいことが、飼育法の未熟を招來して居ると同樣、生産厩肥の取扱法にも遺憾の點多く、加之本質を異にする堆肥の取扱法を其のまゝ厩肥の處理上に應用し、爲めに漠大なる肥料分の損失を招いて居る有樣である。云々」

右の樣な次第で要するに現下の我國農業界では、厩肥の處理利用に關する適當な研究書がなかつたのである。この點に着目して、「有畜農家の參考となり、農村更生の一助」ともならんことを希望して本書が著者御兩人の手に依つて成つたのである。著者御兩人は何れも農林省畜産試驗場の技師で、斯の道の專門家である。

農作物病害講義

逸見武雄著

菊判　二四四頁　二・五〇（〒・一四）　日本農村協會

著者は京都帝國大學教授で農學博士である。本書執筆の目的が農村青年諸氏に農作物病害並にその防除法に關する基礎知識を普及せしめやうと云ふ所にあるのであるから、記述は平易を旨とされてある。唯隨所に稍々難解と思はるゝ資料や、學界に於ける新知識が挿入せられたり、又實際問題と何等直接關係のない病原學要說を附加されたりしてあるのに對しては、著者は「中等學校又は專門學校程度の學生生徒諸氏修學上の參考用として」も本書を意義あらしめんとしたからであると斷つてゐる。

內容は第一に總論を揭げ、次に穀類、蔬菜、果樹、特用作物（煙草、茶、ゴマ、ハッカ、ケシ、甘蔗、藥用人蔘、麻類、桑、藺等合せて約三十種）の順に、個々の作物を例にして病害並にその防除の實際について講じてある。そして最後に「病原學要說」一篇が附加されてある。挿繪も豐富であり、著者にも申分なく、記述も平易で實際的であり、この種のものとしては先づ上乘のものと思はれる。

實驗苹果加工法

舟本平太郎著

四六判　三九四頁　二・五〇（〒・二二）　明文堂

卷頭に揭げられた北海道帝大農學部助教授伊藤光治博士の序に「我が國果實加工品として、販路を海外に迄求め得るものには、南に臺灣のパインアップル罐詰、中部に紀州靜岡地方の蜜柑罐詰あり、次に來るもの

は北の青森、北海道に於ける苹果加工品ではあるまいか」とある通り、苹果の加工は正に勃興の途上にある新らしい農村工業の一つである。著者は苹果の主産地青森縣に永く教職に在つてその實際を擔當された人と云ふ。記述は平易懇切をつくしてゐる。

内容は先づ「加工用原料」としての苹果そのものゝ品種品質、砂糖、香料、着色劑、炭酸ガス、防腐劑についての常識を述べてゐる。次に「加工用材料」の名の下に罐容器、壜容器、王冠口、ラベル（貼付紙）、包裝材料、清澄並に濾過材料、用水等仲々微に入り細を穿つてゐる。次は「加工設備」であるが、こゝでも家庭的小經營の設備、組合組織の經營の設備、工業的經營設備等に分つて仲々に詳細である。次はいよ〳〵「加工法各論」であるが、こゝには苹果液、苹果シラップ、苹果酒、苹果ブランデー、苹果酢、苹果ジャム、苹果ゼリー、苹果バター、苹果化粧水、苹果菓子、苹果粕漬、苹果罐詰、乾燥苹加、ペクチン等、可也多くの種類の加工品について實際的に製法が説明されてある。

實用農藝全書　第八、九

明文堂發行

小型本　各一・二〇　〒各・一四

この叢書については既に前輯に於ても前々輯に於ても記述ずみであるから、唯簡單に内容目次を示すに止めておく。

第八　畜　産　　美川重夫　後藤新著　三八六頁

家畜――家畜飼養の目的――飼料に關して四項目――飼養法、飼養標準――榮養率及び消化率――家畜の管理――畜舍建設――年齢の鑑定――家畜體の特徴――家畜の選擇――家畜の審査――家畜の品種――牛――馬――豚――緬羊――山羊――家兎

第九　蔬蔬（果菜）　渡邊誠三著　三六九頁

西瓜――南瓜――胡瓜――甜瓜――越瓜――茄――蕃茄――草苺

收益增進　蔬菜園藝精説

安藤安孝著

菊判　六七二頁　六・二〇　〒・二二　賢文館

著者は現在富山縣農事試驗場長であるが、本書は著者の前任地兵庫縣農事試驗場に於ける經驗を主としたものである。從つて風土的には明石市附近を中心とし、市場關係も阪神市場を對象として記載したものである。

内容は三編に分たれてゐる。第一編は緒論の名の下に、土壤、肥料、蔬菜栽培の一般的方式、溫床、溫室品種改良に關すること等を總論的に述べてゐる。第二編は販賣と經營に關するもので、これは前述の通り大阪神戸の卸賣市場を具體例として採用してゐる。本書の主編は第三編の「栽培の實際」であることは云ふ迄もない。こゝでは果菜類（胡瓜、南瓜、その他の瓜類、蕃椒、菜の類、豆類等二十二種）、葉莖苺類（白菜、甘藍の類、葱類、チシヤ、ホウレン草、ウド、アスパラガス、筍その他三十種）、根菜類（大根、芋、百合、ワサビ、蓮等十六種）及び雜類の四つに分つて、大體品種、風土、栽培法、收穫、採種、病虫害、收支、特殊栽培法（促成栽培、溫室栽培等）、加工と云ふ順に記述してある。記述は實際が主であるから勿論少しも難解の點はない。稍々高價であるが收益增進の爲めの資本と思へばそれ程でもないと思ふ。安くても役に立たない本を買ふよりは何程得であるかわからない。

新興日本の工業と發明

大河内正敏著

四六判　二八九頁・九〇（〒・一〇）　日本青年館

本書は新興日本叢書中の一篇として出版されたものであつて、著者の抱かるゝ産業問題に關する種々の抱懷が廣い範圍に亘つて陳べられ、就中精密機械工業の現狀並びに將來についての論述、及び發明とその發明の工業化の問題についての論述に大いに力が至されてある。

著者は十八世紀末から十九世紀にかけて起つた所謂産業革命、及びそれに依つて結果した産業界の資本主義化に對して、現在を第二の産業革命と稱し、資本主義工業に取つて代るに智能主義工業を以てすべきを力説してゐる。この近代的な智能主義工業の最もよき例として著者の所謂「一塊の石炭、一升の石油も産出せず、一噸の鐵も自給出來ない天然資源貧弱なる山間の小國」瑞西の機械工業のすぐれたる現狀を述べて他山の石としてゐる、そして更に著者は自らの學殖と經驗とを基礎として、我國現在の科學界と事業界とを以てすれば、外國で成功してゐるあらゆる工業は、我國に於ても必ずや成功すべきことを力强く主張し、この意味で自由通商論を單なる英國流の受け賣り論として斥け、寧ろ關稅の保護による國内工業の振興策に好意を寄せてゐる。

又發明及びその工業化の問題に關しては、發明そのものよりも、その發明を如何にして工業化するかと云ふことに問題の重點をおき「發明家が一寸の思ひつきで大きな發明をした樣な顏をしてゐるのは、眞の大發明となる爲めには未だ〳〵ほんの序の口であることを知らない爲であらう」と云つて發明されたもの、工業化と云ふことが、發明と同じ樣な難事業であることを說いてゐる。之れは我國に於て往々見らるゝが如き發明家たると同時に事業家たらうとしてゐる人々に對しては如何にも適切な苦言であると思はれる。

要するに産業の合理化、國内工業の振興について論じた、卓拔なる主張として、次時代を背負つて立つべき諸君には是非一讀を薦め度い。因に著者は工學博士で理化學研究所長であることは云ふ迄もないことであるが、尙本書が文部省の推薦圖書であることを附記しておく。

會計讀本

菊判横組　三一六頁　一・五〇　〒・一五　日本評論社

高瀨莊太郎著

この前に簿記の本をお奬めしたが、これも同じやうに簿記の本でもあるが、會計の全體から說いてゐるところがちがふ。そしてこれは商業從事者に限らず、誰でも知つておいていゝ知識を書いたものだから、一層纏つたものを與へられていいとおもふ。

會計といへば家計もあるし、會社會計もあるのだ。しかし原理は同じことである。財産の狀態を明かにするといふことには變りがない。そのための根本の方法が簿記なのだから、簿記を說く本のやうに勢ひなるわけであるが、この本でも簿記のことを一通り說明しながら說いてゆくのである。たゞ簿記の本はあくまで記帳といふことを主とするのである。けれどこのやうな本では會計とはかういふことをすることだと說明するのが目的で、その道々簿記のことを說いてゆくのである。

流石に大家の手になるものとて、たいへん解り易い。これで一通り記帳の仕方もおぼえるであらうし、會計の全般が大體どんなものか解るとおもふ。會計を知ることは、つまりは良い會計、合理的な經濟を立てゝゆくことに最後の目的があるわけであるから、單に帳簿をつけてゆくといふやうな技術に止まるものではない。だから誰しも一應心得ておく必要があるのである。

良店員になるまで

四六判　二〇八頁　一・〇〇　〒・〇九　雄風館書房

井關純著

前に「良店員を育てるまで」といふ標題で使ふ人の立場から一書を著はした著者は、こんどは使はれる人の立場から書いたのである。著者は實業界といふ雜誌の主幹で、あくまで實際的に、「誰にでも讀み易い文章をもつて事を進めて行つた事と、出來もしない教訓を、學校の修身ばりに述べたのでなく、誰にも出來る事を述べて云つた」といふところに誇をもつて書かれたものである。「修養篇」「店に出る迄」「販賣術篇」の三篇から出來てゐるが、なるほど讀んで見ると、お話をするやうに誰にでも解り易く、納得のゆくやうに書かれてある。「良い店員になる事は、結局良い人間になる事」といふ極はめて平凡な結論なのであるが、それが實際に當つてどうすべきかといふことになると、なかなかさう簡單にゆくものではない。「客の送り方」「電話の

掛け方、聞き方」にまでその心得が實行されなければならぬのであるから、實際に通じた、心の行屆いた人でないと容易に說いて聞かせるわけには行かない。この書は親切な叔父さんのやうに懇ろに說いてゐるのである。あたりまへのやうなこと、わかりきつたことでも、なか〳〵實行はむづかしいし、それをなるほどと納得させて說くことも容易に出來るものではない。商店實務に從事せられる諸君は一讀して然るべきものである。

推薦圖書目錄

昭和十二年七月二日印刷
昭和十二年七月七日發行

【定價五錢】

編輯兼發行者　東京市四谷區明治神宮外苑霞ヶ丘口　下村虎六郎

印刷者　東京市麴町區麴町五丁目二番地　杉田彌太郎

發行所　東京市四谷區明治神宮外苑霞ヶ丘口　大日本聯合青年團

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black